

第四回 福原徹 演奏会

# 徹の笛

本日はお忙しい中ご来場いただき、誠にありがとうございます。

2006年の第三回演奏会から、六年の月日が経ちました。自分の中に何がしかの蓄積が出来るまで、あるいは何か新しい考えが浮かぶまで、リサタイトルは暫く休止と決めておりました。

—昨年、師匠が亡くなりました。

そして、昨年の大震災。

音楽の意味、音楽を<sup>なりわい</sup>生業としている者の役割、ということなどに、否応なく向き合わざるを得なくなりました。

前へ進みたいのなら、このまま休んでいてはいけなのではないか。

もちろん、六年間じっとしていたという訳ではありません。長唄などの古典を中心とした演奏活動のほか、坪内逍遙訳のハムレットを音楽化したり、今までの自作品を新たに録音しCDとして発表したり、また晩年の中村芝翫丈の「鐘が岬」を一か月勤めさせて頂いたり、「春宵の響」のボランティアスタッフと共に宮城県東松島市でコンサートをしたり…と、皆様方のお力やお導きにより、古典・創作を問わず様々な機会を頂戴いたしました。

そうした中で、やはり自分の責任で、自分から矢面に立つことも避けてはいけない、と強く感じるようになりました。過去のプログラムに記した「笛には未知の可能性があると信じています…新しい笛の音楽を作るためには、まず演奏家自身が作曲し、演奏しなければ」(第一回)という考えや、「笛の魅力のアピールのみでなく、笛を通して音楽を見つめ直す事で邦楽の発展、さらには新しい音楽の創造に、ほんの僅かでも寄与できないだろうか」(第三回)と夢見る気持ちは、今も全く変わっておりません。

あまり風呂敷を広げ過ぎず欲張らず、素直に笛と向き合う、音楽と向き合う、自分と向き合う…そんなことを考えつつ、今日からリサタイトルの「第二シーズン」を始めさせていただこうと思います。

今回も、共演者の中川俊郎さん、スタッフの皆様はじめ、多くの方々のご尽力、ご協力をいただきましたこと、誠に有難く存じます。

最後になりましたが今日ご来場賜りました皆様に、改めて御礼申し上げます。本日はありがとうございました。

福原 徹

		★ PROGRAM	
	福原徹 作曲	序曲 ―能管による―	<span>〔</span> 初演 <span>〕</span>
		●能管 ― 福原 徹	
	初世杵屋佐吉 作曲 福原徹 補曲	長唄 黒髪	
		●篠笛 ― 福原 徹	
	福原徹 作曲	solo 01	<span>〔</span> 初演 <span>〕</span>
		1. (静かに、強く)	
		2. (激しく)	
		3. (踊る)	
		4. (自由に)	
		5. (安らかに)	
		●篠笛 ― 福原 徹	
		————— 休憩 —————	
	福原徹 作曲	林の中にいる象のように	<span>〔</span> 初演 <span>〕</span>
		第一章 月の光を浴びて立つ一本の松	
		第二章 三本の木	
		第三章 千年の桜	
		●篠笛・能管 ― 福原 徹	
		●ピアノ ―———— 中川俊郎	

\*本日の演奏はライブ録音しております。

### 序曲 ―能管による―

能管の独奏曲。リスタートの幕開けは、古典的なもの ―古典に聞こえるような曲― で始めたいと思う。普段、古典として演奏している江戸時代の長唄よりも、もっと古い感じ。古のイメージが浮かぶようなもの。

とは言うものの、私は昭和生まれ、そして今は平成。本当に古い形のものが出来るはずもない。しかし、明治時代に長唄の名曲「元禄風花見踊」が作られたのだから、不可能と決まってしまうものでもない、と思うのだ。

### 長唄 黒髪

1784 (天明4) 年初演の長唄、メリヤス物。前回は地歌「ゆき」を篠笛の独奏で吹いたが、今回は「黒髪」。本来あるべき唄や三味線を入れずに笛だけで自由に演奏するので「補曲」としたが、特に変わったことをするというわけではなく、素直に「黒髪」を吹く。

笛の稽古では、最初に「さくらさくら」のような童謡や抒情歌を習い、やがて長唄の「明の鐘」(宵は待ち)、「黒髪」などへ進む。メリヤス物の笛は曲想まで考えて吹こうとすると大変難しいのだが、曲調がゆっくりで指使いも易しいので初心者の教材として用いられるのだろう。長唄の持つ味わいを初期の段階から感じるようにというもあるかも知れない。しかし「黒髪」は初心者にとっては長い曲なので終わりまでたどり着くのに四苦八苦する。私も例外ではなく、「明の鐘」までは楽しく稽古していたのに「黒髪」で音が出なくなってしまった。師匠が「今日はどうしたんだろうねえ」とニコニコされていたのを今でも思い出す。

（歌詞）黒髪くろかみの結むすばれたる思おもひには 解とけて寝た夜の枕まくらとて ひとり寝る夜よの徒枕あだ袖そでは片敷かたふくつまちゃといふて 愚痴おなごな女子むすめの心こゝろも知らでしんと更かけたる鐘かねの声こゑ ゆうべの夢ゆめのけさ覚おぼめて 床とこし懐なつかかしやるせなや 積たもると知らで積たもる白雪しろゆき

### solo 01

篠笛の独奏曲。低い調子（一笨）の篠笛による、ごく短い曲を五つ並べたもの。数年前から笛と他の楽器による二重奏「duo」シリーズを発表しているが、笛の独奏も沢山作らなくてはと思い、今回は機会に「solo」シリーズを立ち上げることにした。「1」ではなく「01」としたのは、数曲だけではなく、数十曲作ろう、という目標を立てているからなのだが、先行している「duo」シリーズは数年経ってもまだ「04」までしか来ておらず、二桁には程遠い。

## 林の中にいる象のように

笛とピアノによる、三章のコラボレーション。後述するように、第三章がこの作品の構想の発端となっている。

#### 月の光を浴びて立つ一本の松

何で見たのか、記憶がはっきりしない。すっくと立つ一本の松に、天から月光が射している。気高く美しい一本の松。こちらはそれを見上げている。その写真を探したのだが、似たものは沢山あるものの、その一枚が見つからない。もしかすると、当時たくさん見た映像をもとに、自分の頭で無意識のうちに捏造してしまったものなのだろうか？

すでに保存の為に切られてしまった後であったが、その松のあった場所を訪ねることができた。恐怖、脅威の爪痕はここかしこにあり、復興には程遠い。ここに立つて初めてわかった、その猛威の幅、距離。途方もなく、広い。

#### 三本の木

レンブラント・ファン・レイン (1606~69) を、学生時代からずっと追いかけている。彼の作品の何に惹かれているのか、いまだにわからない。それがわかれば、自分のささやかな創作活動にも、何かしらヒントを得られるのかも知れないが、ただじっと見つめるばかり。先方は作品として300年以上もあり続けているわけだから、何も変わっていない。見るたびに何かが変わるのは、こちらの側なのであろう。私にとってレンブラントと対面することは、自分の「定点観測」。「三本の木」は油彩ではなくエッチング (版画) で、彼の代表作の一つ。



#### 千年の桜

第二回リサイタルで「千年の桜」という作品を発表したが、その中の、福島県三春の滝桜のイメージで作ったメロディをふくらませて作ったのが「三重奏曲」(第三回で初演) である。

震災直後に、中川さんのご縁でインターネットのユーストリームチャリティライブに参加させて頂いた折、笛とピアノで何か…ということになり、急遽その「三重奏曲」の後半部分 ―三春の滝桜のところ― を二人で演奏した。その後も何度かそのスタイルで演奏する機会があり、これは抜粋というだけでなく一つの形にしておきたい、そしてさらに、これを終章に持つ組曲を新たに作りたい、と思うようになった。

以上の三章からなるこの作品、タイトルを付ける段になって途方に暮れてしまった。いろいろ考えてみるものの、どれもしっくり来ない。そんなとき、悶々としながら書棚にあった本をめくっていたら、突然こんな言葉が迫って来た。

「つとめはげむのを楽しめ。おのれの心を護れ。自己を難処から救い出せ。―泥沼どろに落ちこんだ象のように。 … (中略) … 一人で行くほうがよい。孤独ひとりで歩め。悪いことをするな。求めるところは少なくあれ。―林の中にいる象のように。」

〔福原 徹〕



写真 大窪道治

## 福原 徹 (ふくはら・とおる / 邦楽囃子笛方)

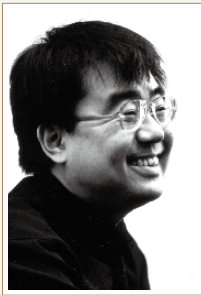
1961年東京生まれ。六世福原百之助(のちの四世宗家寶山左衛門・人間国宝)に入門、福原徹の名を許される。東京藝術大学音楽学部邦楽科卒業。邦楽囃子笛方として、長唄・箏曲などの演奏会、日本舞踊、歌舞伎の舞台、放送、海外公演等で古典演奏活動が続けると共に、笛を中心とした作曲に取り組む。

2001年第1回演奏会「徹の笛」(津田ホール)を開催、平成13年度文化庁芸術祭大賞(音楽部門)を受賞。2002年~2003年、新作連続演奏会「徹の笛 in MUSICASA」を隔月で連続六回開催。2004年第2回「徹の笛」、2006年第3回「徹の笛」(紀尾井ホール)を開催。今年で第18回を迎えた洗足池の野外コンサート「春宵の響」では、初回から企画構成にも携わっている。

東京藝術大学(2007年~)、有明教育芸術短期大学(2009年~)、清泉女子大学(2001年~2003年)等の非常勤講師を勤める。NHK文化センター(青山、浜松、名古屋)講師。また、東京、浜松、彦根などで指導にあたり「百笛会」を主宰。長唄協会会員、創邦21同人(監事)、NPO法人大田まちづくり芸術支援協会アドバイザー。

著書：「やさしく学べる笛教本」(2003年)。

C D：1997年作品集「徹」、2007年コンサートライブ盤「徹の笛」、2009年二枚組の作品集「lift off」を発表。



## 中川俊郎 (なかがわ・としお / 作曲家・ピアニスト)

1958年東京生まれ。桐朋学園大学音楽学部作曲科卒業。作曲を三善晃、ピアノを末光勝世、森安耀子各氏に師事。70歳になるジョン・ケージを迎えて行われた「MUSIC TODAY '82(武満徹企画構成)」の一環として開催された10周年記念国際作曲コンクールで、自作自演で第1位。ジョン・ケージにも高く評価される。88年村松賞、およびグループ「アール・レスピラン」の一員として第12回中島健蔵音楽賞を受賞(現在は同グループを脱会)。2009年サントリー芸術財団主催により、オーケストラ作品個展が開催され、その成果に対して第28回中島健蔵音楽賞受賞。現在、日本現代音楽協会理事、日本作曲家協議会理事。作曲家団体深新會会員。CM音楽の分野でも受賞多数。1999年から2001年まで神奈川県立音楽堂のレジデント・アーティストグループ「トリオ・デュ・モンド」を、ヴァイオリン、箏、ピアノ(チェンバロ兼)という異例の編成で結成し話題となる。2005年、曾我部清典、松平敬とともに双子座三重奏団を結成。今までの他のコラボレーションの相手には、邦楽囃子笛方の福原徹、映画「千と千尋の神隠し」の主題歌で知られる作曲家・歌手の木村弓などの各氏がいる。東芝EMIから烏龍茶のCMばかり集めた“chai”、ピアノソロアルバムを兼ねた作品集“Cocoloni utao”、クラシックの名曲の中国楽器によるカバーアルバム“Chai Classic”をリリース。

### 2012年12月7日(金) 7時開演 銀座 王子ホール

後援： 公益財団法人 日本伝統文化振興財団  
(有) 邦楽ジャーナル  
邦楽の友社  
制作： 日本伝統音楽振興会 黒河内茂  
舞台監督： 清野正嗣  
協力： 加藤繁治  
主催： 福原徹

次回のご案内

### 徹の笛 第五回福原徹演奏会

平成25年(2013年)11月20日(水) 銀座 王子ホール